

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語と欧米諸言語との対照研究：  
英語・スペイン語・ポルトガル語・フランス語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 聖子, 佐々木, 倫子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003306">https://doi.org/10.15084/00003306</a>

# 日本語と欧米諸言語との対照研究： 英語・スペイン語・ポルトガル語・フランス語

日本語教育センター第二研究室 藤井聖子・佐々木倫子

## 要旨：

日本語教育センター第二研究室では、現在、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語それぞれの言語に関して、日本語との対照研究を進めている。日英対照としては、現時点では、談話・語用論上の対照を押し進めるため、会話スタイルの分析を行っている。日西では、統語現象と意味の問題を取り上げている。日葡対照としては、ブラジル人と日本人との言語接触の局面を、社会言語学的アプローチで調査している。日仏では、音声、特にアクセント、イントネーション、音声言語コミュニケーションに付随するジェスチャーを取り上げ、音声及びパラ言語の領域における対照を進めている。

これら四種類の切り口で対照研究をすることは、それぞれの言語での対照研究の背景や必要性が異なっている現状に基づいて立案したことであるが、同時に、日本における外国語（第二言語）教育と言語事情をふまえた対照研究の四種類のアプローチを試行し押し進めようとする試みでもある。

本報告では、これらの研究の目的・方法・意義を概観する。

**キーワード：** 日英対照 日西対照 日葡対照 日仏対照

## 1. はじめに

日本語教育センター第二研究室で行っている日本語と欧米諸言語との対照研究の概観を紹介したい。

現在、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語それぞれの言語に関して、日本語との対照研究を進めている。それぞれの言語領域における対照研究の背景や外国語としての日本語や該当言語の教育の実情を考慮した上で、以下のような研究課題を立案した。日英対照としては、談話の分析を中心に語用論上の対照を押し進めるため、会話スタイルの分析を行っている（第2節参照）。日西対照としては、統語現象と意味の問題を取り上げ、動詞述部を軸に分析している（第3節）。日葡対照としては、ブラジル人と日本人との言語接触の局面を、社会言語学・言語教育学・社会学的アプローチで複合領域的に調査している（第4節）。最後に、日仏対照としては、音声、特にアクセント、イントネーション、音声言語コミュニケーションに付随するジェスチャーについての対照を進めている（第5

節）。日西、日葡、日仏に関しては、客員研究員の多くの働きを得ている。

## 2. 日本語と英語との対照研究

担当者

藤井聖子・佐々木倫子

### 研究の目的

日本語と他の言語との対照研究を考えた時、英語との対照研究は歴史も古く、様々な研究者によってなされてきた分野である。当研究室での対照研究が始まる前から、日本国内だけでなく国外でも、様々な研究者による成果が発表されてきた。英文学研究の基礎としての言語研究、文学論の延長にある対照研究、書誌学の延長にある対照研究、日本人に対する英語教育の基礎としての対照研究、言語理論の検証から発した対照研究などが見られる。当研究室における日英語の対照研究は、英語を母語とする学習者が、(1)日本人とコミュニケーションを持つ際に直面するであろう障壁を明らかにすること、(2)第二言語としての日本語を習

得する際に直面するであろう障壁を明らかにすることを基本的な目的としている。

### 研究方法

近年特に盛んなのは、地球的規模の交通・通信網の発展による直接的な言語接触の機会を反映する研究である。個人的会話からマスメディアの利用まで、様々なコミュニケーションの展開に対応して発展してきた対照研究の分野である。言語構造を中心とした対照と異なり、変化しつつある言語運用の過程をとらえることを試みたり、背景となる社会文化情報といった要素にまで広げて考察する傾向も強い。

1. 横軸の拡大 言語単位を広げる。文単位重視から談話単位へ。
2. 縦軸の拡大 狭義の言語の背後にある社会文化的要素の取り入れ。
3. 動的な研究へ。(どのようなプロセスで人は発話を理解し、コミュニケーションを持つのか、言語習得はどのように起きるか、など。)

これまで、当研究室でなされてきた日英対照研究も、そのような流れを反映している。日英対照語用論というひとつの分野にあっても、書きことばデータに話しことばデータが加わり、さらに現在進行中の研究には、在日アメリカ人と在米日本人との言語意識調査の比較対照、英語母語話者の中間言語研究などもある。

### 研究成果

現在の日英対照研究の課題である「日本語と英語との対照言語学的研究－会話スタイルの分析－」につながる研究では、これまで以下の成果を得ている。

1. 「会話の自然さについて－日英対照研究の視点から－」（『研究報告集14』）では、対話構造の日英対照研究を行う際のデータの持つ問題点の整理を行った。
2. 「会話スタイルとレポート－日英・若い女性の座談例から－」（『研究報告集15』）では、東京、シンガポール、ロンドンで行った、若い女性の座談資料を分析し、文化的背景が異なる場合

の会話スタイルとレポートとの関係を探った。

3. 「日米対照:女性の座談－発話文の数量的分析を中心に－」『研究報告集17』では、日米の4種の女性座談の分析を進め、収集データの質の検討と発話文の数量的分析を試みた。

## 3.日本語とスペイン語との対照研究

### 担当者

- 大倉 美和子（京都工芸繊維大学教授）  
高垣 敏博（東京外国語大学教授）  
三原 健一（大阪外国語大学教授）  
上田 博人（東京大学教授）  
福寫 教隆（神戸市外国語大学教授）  
青山 文啓（桜美林大学助教授）  
野田 尚史（大阪府立大学助教授）  
藤井 聖子（国立国語研究所）

### 研究の目的と意義

日本人とスペイン語圏の人々との接触が増し、スペイン語圏の人々への日本語教育や日本語話者へのスペイン語教育もより活性化する中、日西両語の対照研究はその重要性を増している。当研究所の日西対照研究は、この分野の確立に多少の寄与をしたと自負している。現時点では言語の構造に深く立ち入った精密な研究がさほどの進展を見せていないことに配慮し、本研究は文の核ともなるべき動詞を切り口に、類型的に異なる日西両言語を対照している。

日英対照に偏重しがちだった統語現象の対照研究を他の言語と日本語の間で行うことは、両言語の教育は勿論であるが、言語習得研究や類型学的研究のためにも、重要である。

### 研究方法

スペイン語と日本語における動詞句の形式と意味・機能に関わる諸問題を、アスペクト、ヴォイス、活用、拡大活用論、結合、叙法、モダリティーなどの観点から考察している。また、これらの観点からスペイン語と日本語を対照する場合の一般的な問題

を明らかにするよう目ざしている。

進行中の事例研究は、「日西語の結果状態を表す受動文」(高垣)、「日本語の授受動詞とスペイン語の与格接語」(上田)、「日西語の拡大活用論」(野田)、「日西語の活用と統語」(青山)、「数量詞連結構文：提示性 and/or 結果性」(三原)、「スペイン語の叙法に関する最近の研究動向」(福寛)、「日西語のポライトネス」(大倉)等である。

さらに、スペイン語と日本語との対照研究のためのコーパスを蓄積している(上田ほか)。また、日西対照研究の研究動向を調査し、文献リストや書評を作成している。

### 研究の経緯と研究成果

当研究室では、1990(平成2)年より日本語とスペイン語との対照言語学的研究を開始した。1990(平成2)年度の1年間の試行期間を経て、1991(平成3)年度から第一期の研究課題が軌道に乗り、1994年3月に終了した。1994(平成6)年度からは、第二期の研究課題「言語レベルと結合関係」を始め、1997年3月に終了した。これらの研究成果は、以下の報告書で公表した。

1. 『国立国語研究所報告 108 日本語と外国語との対照研究 I 日本語とスペイン語(1)』1994年
2. 『日本語と外国語との対照研究 V. 日本語とスペイン語(2)』1997年

本研究「日西対照研究－動詞とその周辺－」は1997(平成9)年度から開始した第三期の課題である。公開研究成果発表会を開催し、研究成果の最終報告書を来年度(平成11年度)に『日本語とスペイン語(3)』として刊行する予定である。

### 4. ブラジル人と日本人との接触場面

担当者

河野 彰(大阪外国語大学教授)  
エレン ナカミズ(京都外国語大学講師)  
三田 千代子(上智大学教授)  
太田 亨(金沢大学講師)

スミコ ニシタニ イケダ(大阪外国語大学教授) — 1997年度まで  
藤井聖子・佐々木倫子(国立国語研究所)

### 研究の目的

日本語教育において、学習者の増加と多様化が著しい。学習者の母語及び文化的背景も多様化し、なかでも、在日のポルトガル語を母語とする人々の増加は注目されるところである。

本研究は、このような社会的背景をふまえ、ブラジル人と日本人との言語接触、日本及びブラジルの社会における言語運用、言語意識、言語教育などを、社会言語学・言語教育学・社会学的アプローチで複合領域的に調査し、分析することを目的とする。また、ポルトガル語母語話者と日本語母語話者の言語背景及び文化・社会的背景の差異がコミュニケーションにどのような影響を与えるか等を見ることによって、第二言語使用と習得上の問題点と現状の一面を明らかにすることを目的とする。

### 研究方法

在日日系ブラジル人、ブラジルにおける日系ブラジル人、そして、ポルトガル語学習やブラジル滞在の経験をもつ日本人の生活や言語について調査を進める中で、ブラジル人と日本人との接触場面や言語接触に関して、以下の局面が明らかになってきた。

- 在日日系ブラジル人の社会生活と地域社会
- 在日ブラジル人の日本語の習得と使用
- 在ブラジル、日系ブラジル人への日本語教育
- 在ブラジル、日系ブラジル人の日本語維持と言語接触
- 日本人のポルトガル語の習得と使用
- 幼児期に来日した在日日系ブラジル人のポルトガル語の習得と維持

それぞれの局面について文献調査・考察・討議をし、フィールドワーク、事例研究を進めている。事例研究としては、在日日系ブラジル人の文化生活と地域社会：神奈川県外国籍住民との共生の試み(三

田)、日本在住ブラジル人就労者による終助詞「よ」と「ね」の使用(ナカミズ)、コロナ語の歴史と現状(太田)、日本人のポルトガル語におけるコミュニケーション能力(河野)などの調査が進行中である。

## 研究の経緯と成果

日本語とポルトガル語との対照研究の第一期は、1993(平成5)年4月より3年計画で開始し、1996(平成8)年12月に最終報告書『日本語と外国語との対照研究Ⅲ—日本語とポルトガル語』を刊行した。

本研究「ブラジル人と日本人との接触場面」は、日本語とポルトガル語との対照研究の第二期として、1996(平成8)年度後半より開始し、現在に至っている。

本研究の研究成果の最終報告書を来年度(平成11年度)に『ブラジル人と日本人との接触場面』としてまとめる予定である。また、公開研究成果発表会を計画している。

## 5. 日本語とフランス語の音声

担当者

鮎澤孝子(東京外国語大学 教授)

前国立国語研究所言語教育部長)

荒井雅子(AKP同志社留学生センター講師)

大木充(京都大学 教授)

郡史郎(大阪外国語大学 助教授)

田中幸子(上智大学 助教授)

藤井聖子(国立国語研究所)

## 研究の目的と意義

フランス語を母語とする日本語学習者、および日本語を母語とするフランス語学習者のために、日本語・フランス語の音声、特にアクセント、イントネーション、音声言語コミュニケーションに付随するジェスチャー、及びそれらの教授法についての研究を行う。これまでに、日仏語の母音・子音についての研究は進んでおり、学習者の習得上の問題点についての報告などもなされている。しかし、それぞれの音声言語の韻律的な特徴、音声言語に付随するジェスチャーなどについての研究やその習得上の

問題点についての研究は進んでいない。しかし、このような要因は音声言語でのコミュニケーションの場面においては重要な意味をもつものであり、少なくとも、その意味を理解する能力を習得することは、これからの第2言語習得においてますます必要になる。

## 研究方法

フランス語を母語とする学習者の日本語アクセント・イントネーションパターンの習得に関する調査、日本語のアクセント・イントネーション教育教材、フランス語のリズム、フランス語教育におけるジェスチャーの扱い方、ジェスチャーのデータベース化、音声教育関係文献の解題などに焦点をしばって、調査・研究を進めている。

## 研究成果

今年度が4年計画(平成7—10年度)の最終年度にあたるので、現在、平成6年度、平成8年度に開催した研究会の内容紹介を含めた研究報告書をまとめている。

## 6. おわりに

日本語研究センター第二研究室で行っている日英対照、日西対照、日葡対照、日仏対照研究を概観した。

それぞれの言語での対照研究の背景や必要性、社会的背景に添って、それぞれ異なったアプローチと切り口で分析を進めている。対照研究の四つのアプローチ—すなわち、(1) 談話分析・語用論からのアプローチ、(2) 意味論と統語論からのアプローチ、(3) 社会言語学・社会学からのアプローチ、(4) 音声学からのアプローチ—を試行していることは、国際化する日本社会における言語事情をふまえた対照研究の方向性を模索し、開拓するという意義もある。

言うまでもなく、それぞれのアプローチは、現在進行中の研究の言語のみに意義深いわけではない。今後、多角的な対照研究がさらに展開することを願っている。